

# 骨董羹

—寿陵余子の仮名のもとに筆を執れる戯文—

芥川龍之介

青空文庫



## 別乾坤

Judith Gautier が詩中の支那は、支那にして又支那にあらず。葛か  
つしかほくさい飾北齋が水滸すゐごぐわでん画伝さしゑの挿画も、誰か又是を以て如実によじつに支那  
 を写したりと云はん。さればかの明眸めいぼうの女詩人ぢよしじんも、この短髪  
 の老画伯も、その無声の詩と有声の画ぐわとに彷彿はうふつたらしめし所いはゆ  
る謂支那は、寧ろむし彼等が白日夢裡はくじつむりに逍遙遊せうえうゆうほしを恣まにしたる別乾坤べつけんこ  
んなりと称すべきか。人生幸さいはひにこの別乾坤あり。誰か又小泉八雲こいづみやくも  
と共に、天風海濤てんふうかいたうの蒼々浪々たるの処、去つて還らざる蓬ほう  
ら菜らいの蜃中楼しんちゅうろうを歎く事をなさん。(一月二十二日)

## 輕薄

元の李※、文湖州の竹を見る数十幅、悉意に満たず。東坡山  
 谷等の評を読むも亦思ふらく、その交親に私するならんと。偶  
 友人王子慶と遇ひ、話次文湖州の竹に及ぶ。子慶曰、君未真蹟  
 を見ざるのみ。府史の蔵本甚真、明日借り来つて示すべしと。  
 翌日即之を見れば、風枝抹疎として塞煙を払ひ、露葉蕭索と  
 して清霜を帯ぶ、恰も渭川淇水の間かんに坐するが如し。※感歎措く  
 能はず。大いに聞見の寡陋を恥ぢたりと云ふ。※の如きは未恕  
 すべし。かの写真版のセザンヌを見て色彩のヴァリユルを喋々

するが如き、論者の軽薄唾棄するに堪へたりと云ふべし。戒めずんばあるべからず。(一月二十三日)

### 俗漢

バルザツクのペエル・ラシエエズの墓地に葬らるるや、棺側に侍するものに内相バロツシユあり。送葬の途上同じく棺側にありしユウゴオを顧みて尋ぬるやう、「バルザツク氏は材能の士なりしにや」と。ユウゴオふつく 吁として答ふらく「天才なり」と。バロツシユその答にやいきどほ 憤りけんばうじん 傍人にささや 囁いて云ひけるは、「このユウゴオ氏も聞きしにまさ 勝る狂人なり」と。仏蘭西の台閣フランス亦這般だいかくまたしやはん

の俗漢なきにあらず。日東帝国の大臣諸公、意を安んじて可なりと云ふべし。(一月二十四日)

### 同性恋愛

ドオリアン・グレエを愛する人は Escal Vigor を読まざる可<sup>べ</sup>からず。男子の男子を愛するの情、この書の如く遺憾なく描写せられしはあらざる可し。書中若しこれを翻訳せんか。我当局の忌違<sup>きみ</sup>に触れん事疑なきの文字少からず。出版当時有名なる訴訟事件<sup>そしやう</sup>を惹起<sup>じやくき</sup>したるも、亦是<sup>また</sup>等艶冶<sup>えんや</sup>の筆の累<sup>ひつ</sup>する所多かりし由。著者 George Eekhoud は白耳義近代の大手筆<sup>べ</sup>なり。声名必しもカミ<sup>かならず</sup>

ユ・ルモニエエの下にあらず。されど多士<sup>せいせい</sup>濟々たる日本文壇、  
 未<sup>いまだ</sup>この人が等身の著述に一<sup>いちげん</sup>言の紹介すら加へたるもの無し。文  
 芸<sup>あに</sup>豈独り北歐の天地にのみ、オウロラ・ボレアリスの盛觀をなす  
 ものならんや。(一月二十五日)

### 同人雜誌

年少の子弟<sup>きよきん</sup>醸<sup>きよきん</sup>金して、同人<sup>どうじんぎつし</sup>雜誌を出版する事、当世の流行  
 の一つなるべし。されど紙代印刷費用共<sup>はなはせん</sup>に甚廉ならざる今日<sup>こんにち</sup>、  
 経営に苦しむもの亦<sup>また</sup>少<sup>すく</sup>からず。伝へ聞く、ル・メルキウル・ド・  
 フランスが初号<sup>いちごう</sup>を市<sup>いち</sup>に出<sup>いだ</sup>せし時も、元<sup>もと</sup>より文壇不遇の士<sup>くわうは</sup>の黄<sup>くわうは</sup>

白くに裕ゆたかなる筈はずなければ、やむ無くひとかぶ一株一株六十法フランの債券債券を同人に  
募もりしかど、その唯ゆゑ一おほの大株大株主たるジユウル・ルナルが持株  
すら僅きんきん々四株四株に過ぎざりしとぞ。しかもその同人の中には、ア  
ルベエル・サマンの如き、レミ・ド・グルモンの如き、一代の才  
人多かりしを思へば、当世流行の同人雑誌いへどと雖も、資金はなはだゆんの甚潤  
沢たくならざるを憾うらむべき理由なきに似たり。唯、得難きは当年の  
ル・メルキウルに、象徴主義の大旆たいはいを樹たてしが如き英靈底えいれいていの  
漢かん一一ダアスのみ。(一月二十六日)

## 雅号



日本の作家今は多く雅号ががうを用ひず。文壇の新人旧人を分つほとんど、殆ほとんど雅号の有無を以てすれば足るが如し。されば前さきに雅号ありしも捨てて用ひざるさへ少からず。雅号の薄命なるも亦また甚しいかな。露ロ西亞シアの作家にオシツプ・デイモフと云ふものあり。チエホフが短篇「蝗いなご」の主人公と同名なりしと覚ゆ。デイモフはその名を借りて雅号となせるにや。博覧の士の示教しけうを得れば幸甚かうじんなり。(一月二十八日)

### 青楼

フランス  
仏蘭西語に妓楼ぎろうを La maison verte と云ふは、ゴンクウルが造語

なりとぞ。蓋し青楼美人合せの名を翻訳せしに出づるなるべし。

ゴンクウルが日記に云ふ。「この年（千八百八十二年）わが病的なる日本美術品蒐集集の為に費せし金額、実に三千法に達したり。

これわが収入の全部にして、懐中時計を購ふべき四十法の残余さへ止めず」と。又云ふ。「数日以来（千八百七十六年）日本に赴

かばやと思ふ心止め難し。されどこの旅行はわが日頃の蒐集癖を充さんが為のみにはあらず。われは夢む、一卷の著述を成さん

事を。題は『日本の一年』。日記の如き体裁。叙述よりも情調。

かくせば比類なき好文字を得べし。唯、わがこの老を如何」と。

日本の版画を愛し、日本の古玩を愛し、更に又日本の菊花を愛せる伶※孤寂のゴンクウルを想へば、青楼の一語短なりと雖も、

無限の情味なき能はざるべし。(一月二十九日)

言語

言語は元より多端なり。山と云ひ、嶽と云ひ、峯と云ひ、巒と云ふ。義の同うして字の異なるを用ふれば、即ち意を隱微の間に偶するを得べし。大食ひを大松と云ひ差出者を左兵衛次と云ふ。聞くものにして江戸つこならざらんか、面罵せらるるも猶恬然たらん。試に思へ、品蕭の如き、後庭花の如き、倒澆燭の如き、金瓶梅肉蒲団中の語彙を借りて一篇の小説を作らん時、善くその淫褻俗を壊るを看破すべき検閲官の数何

人なるかを。(一月三十一日)

誤訳

カアライルが独逸文ドイツの翻訳に誤訳指摘を試みしはデ・クインシイがさかしらなり。されどチエルシイの哲人はこの後進の鬼才を遇する事一

反つて甚篤かへ はなはあぢうかりしかば、デ・クインシイも亦またその襟懷いに服して百年の心交を結びたりと云ふ。カアライルが誤訳の如何いかなりしかは知らず。予が知れる誤訳の最も滑稽なるはマドンナを奥さんと訳せるものなり。訳者は楽園の門を守る下僕天使にもあらざるもの

を。(二月一日)

戲訓

往年くめまさ久米正雄氏シヨウを訓して笑迂せううと云ひ、イブセンを訓して  
 燻いぶせん仙と云ひ、メエテルリンクを訓して暝照めいてるりんくわ燐火と云ひ、チ  
 エホフを訓して知慧ちゑほうふ豊富と云ふ。戲訓ぎくんと称して可ならん乎か。二人にに  
 比丘尼んびくにの作者すずきしやうざう鈴木正三、その耶蘇教やそけう弁斥べんせきの書に題して破鬼はき  
 理死端りしたんと云ふ。亦また悪意ある戲訓の一例たるべし。(二月二日)

俳句

紅葉こうえふの句いまだ未古人いまだ靈妙の機を会せざるは、独りその談林だんりん調た  
 るが故のみにもあらざるべし。この人の文を見るも楚そ々たる落墨らくぼく  
 直ただちに松を成すの妙はあらず。長ずる所は精整せいせい緻密ちみつ、石いしがを描いて  
 一細草いちさいさうの点綴てんていを忘れざる功かうにあり。句に短なりしは当然なら  
 ずや。牛門ぎゅうもんの秀才しゅうさい鏡きやうくわ花はな氏の句品くひん遙しやうに師翁しをうの上に出づるも、  
 亦またこの理に外ならざるのみ。遮さ莫も齋さい藤とう緑りよく雨うが彼かの縦横の  
 才を蔵しながら、句は遂に沿門えんもん※黒の輩さくはいと軒けん輕ちなかりしこそ不思議なれ。  
 (二月四日)

松並木

東海道とうかいだうの松並木まつなみき伐きらるべき由、何時いつやらの新聞紙にて読み  
 たる事あり。元もとより道路改修もとの為とあれば止むを得ざるには似た  
 れども、これが為なほに百尺ひやくせきの枯龍斧鉞こりゆうふゑつの災さいを蒙かうむるもの百千な  
 るべきに想到すれば、惜みても猶なほ惜むべき限りならずや。ポオル  
 ・クロオデル日本に来りし時、この東海道の松並木を見て作る所  
 の文一篇あり。瘦蓋煙そうがいを含み危根石きこんを倒すの状、描ゑがき得て靈れいさ  
 彩い奕えき々えきたりと云ふべし。今やこの松並木亡びんとす。クロオ  
 デルもしこれを聞かば、或は恐る、黄面くわうめんの豎子じゆい未王化まだに浴せ  
 ずと長太息ちやうたいそくに堪へざらん事を。(二月五日)

## 日本

ゴオテイエが娘の支那シナは既に云ひぬ。 [Jose' Maria de Heredia]  
 が日本またべつけんこんも亦別乾坤れんりなり。簾裡れんりの美人琵琶びはを弾たんじて鉄衣の勇士  
 の来きたるを待まちつ。景情元もとより日本またべつけんこんならざるに非あらず。 (le samourai)  
 されどその絹きんの白と漆うるしと金きんとに彩いろどられたる世界は、却かへつて是縹へうべ  
 渺うたるパルナシアンパルナシアンの夢幻境のみ。しかもエレディアの夢幻境  
 たる、もしその所在フランスを地図の上に按おじ得えべきものとせんか、恐おそら  
 く仏蘭西フランスには近ちかけれども、日本またべつけんこんには遙はるかに隔へだりたるべし。彼かのゲエテ  
 の希臘ギリシヤと雖いえも、トロイの戦たたかひの勇士の口には一いつ抹まつミュンヘンの  
 麦酒ビールの泡いまだの未消いまだえざるを如何いかにすべき。歎なげずらくは想像またにも亦国



籍の存する事を。(二月六日)

大雅

東海の画人多しとは云へ、九霞山樵きうかさんせうの如き大器又あるべしとも思はれず。されどその大雅たいがすら、年三十に及びし時、意の如く技ぎの進まざるを憂ひて、教を祇南海ぎなんかいに請ひし事あり。血性けつせい大雅に過ぐるもの、何ぞ進歩の遅々たるに焦燥せうそうの念無きを得可けんや。唯、返へす返すも学ぶべきは、聖胎せいたい長養ちやうやうの機を誤らざりし九霞山樵くふうの工夫なるべし。(二月七日)

## 妖婆

英語に *witch* と唱ふるもの、大むねは妖婆えうばと翻訳すれど、年少美貌のウイツチ亦決またして少しとは云ふべからず。メレジュウコウスキイが「先覚者」ダンヌンツイオが「ジヨリオの娘」或は遙しき品下れどクロオフォオドが *Witch of Prague* など、顔玉たまの如きウイツチを描ゑがきしもの、尋ぬれば猶多かるべし。されど白髪蒼顔のウイツチの如く、活躍せる性格少いなきは否いなみ難いなき事実ならんか。スコット、ホオソオンが昔は問はず、近代の英米文学中、妖婆を描きて出色なるものは、キツプリングが *The Courting of Dinah Shadrach Deane* の如き、或は随一とも称すべき乎か。ハアデイが小説にも、妖婆

に材を取る事珍らしからず。名高き Under the Greenwood の中なる、エリザベス・エンダアファイルドもこの類なり。日本にては山まうばおにおにばばば、姥あむろく鬼おに婆ばば共に純然たるウイツチならず。支那にてはかの夜譚やたんず随録あむろく載する所の夜星子やせいしなるもの、略妖婆ほぼたるに近かるべし。

(二月八日)

### 柔術

西人せいじんは日本と云ふ毎ごとに、必柔術を想起すと聞けり。さればにやアナトオル・フランスが「天使の反逆」の一章にも、日本よりパリ巴里パリに来れる天使フランス仏蘭西の巡査を搔かい掴つかんで物も見事に投げ捨つ

るくだりあり。モオリス・ルブランが探偵小説の主人公けふぞく 俠賊り  
 ユパンが柔術に通じたるも、日本人より学びし所なりとぞ。され  
 ど日本現代の小説中、柔術の妙を極めし主人公は僅にいづみきやうく 泉鏡  
 花わ氏が「芍薬しやくやくの歌」の桐太郎きりたらうのみ。柔術も亦予言者または故  
 郷いに容れられざるの歎無きを得んや。好笑かうせう好笑。 (二月十日)

昨日の風流

てうおうほく ごもんぎつし  
 趙甌北が呉門雜詩に云ふ。 えんくわをみつしてこまかにひんぴやうす  
 始めてしるかれいのまたきよめいなるを いまよりおこさずはんくわのゆめ  
 始知佳麗也 虚名、 せうりやうす  
さいえんいちるのせい 従今不作繁華夢、消領茶  
 煙一縷清。又その山塘さんたうの詩に云ふ。 おいてくわんじやうにいればかん  
 老入歡場感

ましやすし  
 易増、煙花猶記昔遊會、酒樓旧日紅粧女、  
えんくわなほしるすせきいうのそう  
しゆるうきうじつこうしやうのぢよ  
すでににたりぜんかたいゐんのそう  
 已似禪家退院僧。一腔の詩情殆永井荷風氏を想はしむ  
いつかう  
ほとん袋がるかふう  
 るものありと云ふべし。(二月十一日)

### 発音

ポオの名 Quantin 版に [Poe:] と印刷せられてより、フランス 西を  
 始め諸方にポオエの発音行はれし由。予等が英文学の師なりし故  
 ロオレンス先生も、時にポオエと発音せられしを聞きし事あり。  
せいじん  
 西人の名の発音の誤り易きはさる事ながら、ホイットマン、エ  
あが  
 マスンなどを崇め尊ぶ人のわがほとけ 仏の名さへアクセントを誤りたる

は、無下むげにいやしき心地せらる。慎つつしまざる可らざるなり。(二月十三日)

### 傲岸不遜

一青年作家或会合の席上にて、われら文芸の士はと云ひさせしに、傍かたはらなるバルザック忽ちその語を遮さへぎつて云ひけるは、「君の我等に伍せんとするこそ烏澁をこがましけれ。我等は近代文芸の将しやうす帥みなるを」と。文壇の二三子夙つとに傲岸不遜がうがんふそんの譏そしりありと聞く。されど予は未いまだ一人のバルザックに似たるものを見ず。元もとより人間喜劇の著述二三子の手に成るを聞かざれども。(二月十五日)

## 煙草

煙草たばこの世に行はれしは、亞米利加アメリカ發見以後の事なり。埃及エジプト、  
亞刺比亞アラビア、羅馬ロオマなどにも、喫煙の俗ありしと云ふは、青盲者せいもうしやり  
流うのひが言ごとのみ。亞米利加土人の煙を嗜たしなみしは、コロムブスが  
新世界に至りし時、既に葉卷あり、刻きざみあり、嗅煙草かぎありしを見  
て知るべし。タバコの名も実は植物の名称ならで、刻みの煙を味  
ふべきパイプの意なりしぞ滑稽なる。されば歐洲の白色人種が喫  
煙に新機軸いだを出したるは、僅に一事輕便なるシガレットの案出あ  
りしのみ。和漢三才わかんさんさい図會いづゑによれば、南蛮紅毛こうもうの甲比丹かびたんがまづ日  
本ほんに舶載はくさいしたるも、このシガレットなりしもの如し。村田むらたの

煙管<sup>きせる</sup>末世<sup>まだ</sup>に出でざりし時、われらが祖先は既にシガレットを口に  
 しつつ、春<sup>しゅん</sup>日<sup>じつ</sup>煦々<sup>くく</sup>たる山口の街頭、天主会堂の十字架を仰い  
 で、西洋機巧の文明に賛嘆の声を惜まざりしならん。(二月二十  
 四日)

ニコチン夫人

ボオドレエルがパイプの詩は元<sup>もと</sup>より、Lyra Nicotiana<sup>ひるがへ</sup>を翻<sup>ひるがへ</sup>すも、  
 西洋詩人の喫煙を愛<sup>め</sup>づるは、東洋詩人の点<sup>てん</sup>茶<sup>ちや</sup>を悦<sup>かつ</sup>ぶと好<sup>かう</sup>一<sup>いつ</sup>対<sup>たい</sup>  
 なりと云ふを得べし。小説にてはバリエが「ニコチン夫人」最も  
 人口<sup>くわい</sup>に噂<sup>いしや</sup>炙<sup>いしや</sup>したり。されど唯輕妙<sup>ひつ</sup>の筆、容易に読者を微笑せ



しむるのみ。ニコチンの名、もと仏蘭西人フランスジアン・ニコツトより出づ。十六世紀の中葉、ニコツト大使の職を帯びて西班牙スペインに派遣せらるるや、フロリダ渡来の葉煙草を得て、その医療に効あるを知り、栽培さいばい大いに努めしかば、一時は仏人煙草を呼んでニコチアナと云ふに至りしとぞ。デ・クインシイが「阿片喫煙者の懺悔ざんげ」は、さきに佐藤春夫氏さとうはるををして「指紋しもん」の奇文を成さしめたり。誰か又バリーの後のちに出でて、バリーを抜く事数等なる、恰あたかもハヴァナのマニラに於ける如き煙草小説を書かんものぞ。(二月二十五日)

## 一字の師

唐たうの任じん翻はん天台中子峯てんたいしんしほうに遊び、詩を寺壁に題して云ふ。「絶ぜ  
 つちやうのしんしうやりやうをしやうず。つるはひるがへつてしよろいしやうにしたたる。  
 頂てい新しん秋しゅう生せい夜や涼りやう。鶴つる翻はん松しょう露る滴てき衣い裳じやう。  
 ぜんぼうつきはてるいつかうのみづ。そうはすゐびにあつてちくぼうをひらく。  
 前ぜん峯ぼう月つき照て一いつ江かう水みづ。僧そう在は翠すゐ微ゐ開か竹ちく房ぼう。「題をし畢は  
 つて後のち行く事数十里、途上一江いつかうすゐ水は半江はんかうすゐ水は若しかざるを覚しり、  
 直ただちに題詩の処かへに回かへれば、何なん人びとか既すでに「一」字けつを削けつつて「半」字  
 に改のちめし後のちなりき。翻はん長ちやう太たい息そくに堪いへずして曰いはく、台たい州しゅう有ひとあり人  
 と。古人が詩に心を用ふる、惨憺經營の跡想ふべし。青せい々せいが句  
 集妻木つまぎの中に、「初夢あけや赤あけなる紐ひもの結むすぼほる」の句あり。予思ふ  
 らく、一字不可、「る」字に易かふに「れ」字を以てすれば可なら  
 んと。知らず、青々予を拝して能く一字の師と做なすや否や。一笑。

(二月二十六日)

応酬

ユウゴオ一夕宴をアヴニウ・デイロオの自邸に張る。たまたまゆうか 偶衆

客くみかづき皆杯を挙げて主人の健康を祝するや、ユウゴオかたはら傍なるフラン

ソア・コツペエを顧みて云ふやう、「今この席上なる二詩人たがひ送たがひに

健康を祝さんとす。亦また善からずや」と。意コツペエが為ために乾杯せ

んとするにあり。コツペエ辞して云ふ、「否、否、座間ざかん詩人は唯

一いちにん人あるのみ」と。意詩人の名なに背そむかざるものは唯ユウゴオ一

人ちになのみなるを云ふなり。時に「オリアンタアル」の作者、忽ち

破顔して答ふるやう、「詩人は唯一いちにん人あるのみとや。善し、さらば我は如何いかに」と。意コツペエが言を翻ひるがへしておのが仰損を示せるなり。曰く「僧院の秋」の会、曰く「三浦製糸場主」の会、曰く猫の会、曰く杓子しやくしの会、方今はうこんの文壇会甚多しと雖も、未滑いへど、いまだわつ脱だつの妙を極めたる、斯かくの如き応酬ありしを聞かず。傍かたはらに人あり。嗤わらつて云ふ、「請ふ、隗くわいより始めよ」と。(二月二十七日)

## 白雨禅

狩野芳涯かのうはうがい常に諸弟子しよていしに教へて曰、「画ぐわの神理、唯当まさに悟得ごとくすべきのみ。師授によるべからず」と。一日芳涯病んで臥ふす。偶たま

白雨天を傾けて来り、深巷寂として行人を絶つ。師弟共に黙して雨声を聴くもの多時、忽ち一人あり。高歌して門外を過ぐ。芳涯莞爾として、諸弟子を顧みて曰、「会せりや」と。句下殺人の意あり。吾家の吹毛劍、单于千金に購ひ、妖精太陰に泣く。一道の寒光、君看取せよ。（三月三日）

批評

ピロンが、皮肉は世に聞えたり。一文人彼に語るに前人未発の業を成さん事を以てす。ピロン冷然として答ふらく、「易々たるのみ。君自身の讃辞を作らば可」と。当代の文壇、聞くが如くん

ば、党派批評あり。売笑批評あり。挨拶批評あり。雷同批評あり。紛々たる毀譽褒貶、庸愚の才が自讃の如きも、一犬の虚に吠ゆる処、万犬亦実を伝へて、必しもピロンが所謂、前人未発の業と做す可らず。寿陵余子生れてこの季世にあり。ピロンたるも亦難いかな。(三月四日)

誤謬

門前の雀羅蒙求を囀ると説く先生あれば、燎原を焼く火の如しと辯ずる夫子あり。明治神宮の用材を賛して、彬々たるかな文質と云ふ農学博士あれば、海陸軍の拡張を議して、朦朧

罷休ひきうあらざる可からずと云ふ代議士あり。昔は姜度きやうとの子を誕たんす  
 るや、李林甫りりんぼしゆ手書を作つて曰いはく、聞きく、弄ろうしやうの喜よろこびありと。客之  
 を視て口を掩おほふ。蓋し林甫りんぼの璋字しやうじを誤つて、字しやうじを書せるを  
 笑へるなり。今は大臣の時勢を慨するや、危険思想の瀾漫びまんを論じ  
 て曰、病既に膏盲かうまうに入る、国家の興廢旦夕にありと。然れども  
 天下怪しむ者なし。漢学の素養の顧られざる、亦甚またしと云はざる  
 可からず。況いはんや方今の青年子女、レッテルの英語は解すれども、四  
 書の素読そどくは覺束おぼつかなく、トルストイの名は耳に熟すれども、李りせい  
 青蓮れんの号は眼に疎うときもの、紛々ふんぶんとして数へ難し。頃日偶書けいじぬまたま  
 林の店頭りんに、数冊ふるの古雑誌を見る。題して紅潮社発兌紅潮第何  
 号と云ふ。知らずや、漢語に紅潮と云ふは女子の月経ほかに外ならざ

るを。(四月十六日)

入月

西洋に女子の紅潮こうてうを歌へる詩ありや否や、寡聞くわぶんにして未之いまだを知らず。支那には宮掖きゆうえき閨けい閣かくの詩中、稀まれに月経を歌へるものあり。王建わうけんが宮詞きゆうしに曰いはく、「密奏みつそう君王きゆうわう知入月しつぎに、喚ひとをよんであひともなつてくんぎよをあらふ人相にんさう伴洗ばんせん裙裾きんこ」と。春風しゆんぷう珠簾しゆれんを吹いて、銀ぎんこ鉤こうを蕩たうするの処、蛾眉がびの宮人の衣い裙くんを洗せんふを見る、月事げつじも亦また風流ふうりゆうならずや。(四月十六日)



## 遺精

西洋に男子の遺精みせいを歌へる詩ありや否や、寡聞にして未い之まだを知らず。日本には俳諧錦繡段きんしうだんに、「遺精驚く暁のゆめ、神しん 叔しゆく」とあり。但ただしこの遺精の語義、果して当代に用ふる所のものと同じきや否やを詳つまびらかにせず。識者の示教しけうを得ば幸かうじん甚なり。(四月十六日)

## 後世

君見ずや。本阿弥ほんあみの折紙をりかみ古今ここんに變ず。羅曼派ロマン起つてシエクス

ピイアの名、四海に轟く事迅雷の如く、羅曼派亡んでユウゴオ  
 の作、八方に麤るる事霜葉に似たり。茫々たる流転の相。目前  
 は泡沫、身後は夢幻。智音得可からず。衆愚度し難し。フラゴナ  
 アルの技を以太利に修めんとするや、ブウシエその行を送つて曰、  
 「ミシエル・アンジユが作を見ること勿れ。彼が如きは狂人のみ」  
 と。ブウシエを晒つて俗漢と做す。豈敢て難しとせんや。遮  
 莫千年の後、天下靡然としてブウシエの見に赴く事無しと云ふ  
 可らず。白眼当世に傲り、長嘯後代を待つ、亦是鬼窟裡の  
 生計のみ。何ぞ若かん、俗に混じて、しかも自ら俗ならざるには。  
 籬に菊有り。琴に絃無し。南山見来れば常に悠々。寿陵余子  
 文を陋屋に売る。願くば一生後生を云はず、紛々たる文壇

の張三李四と、トルストイを談じ、西鶴を論じ、或は又甲主義乙傾向の是非曲直を喋々して、遊戯三昧の境に安んぜんかな。(五月二十六日)

## 罪と罰

鷗外先生を主筆とせる「しがらみ草紙」第四十七号に、  
 天情僊の七言絶句、「読罪与罰上篇」数首あり。泰  
 西の小説に題するの詩、嚙矢恐らくはこの数首にあらんか。左  
 にその二三を抄出すれば、「考慮閃来如電光」茫  
 然飛入老婆房、自談罪跡真耶假、警吏暗殺

うかふきやうか  
 狂不狂」(第十三回)「窮女病妻哀涙紅、車しやせ

いれきろくとしてかをうたふる  
 声 轆 轆 仆家翁、 傾 囊 相 救 客 何 俠、  
なうをかたむけてあひすくうふかくなんぞけふなる

いちどあひあふしゆしのうち  
 一度相逢酒肆中」(第十四回)「可憐小女去邀賓、  
かれんのせうぢよさつてひんをむかへ

じぜんのしよせいはんしのみ  
 慈善書生半死身、 見到室中無一物、 感恩人是動  
みいたるしつちういちぶつなし かんおんのひとはこれどう

じやうのひと  
 情人」(第十八回)の如し。詩の佳否は暫く云はず、明治二

十六年の昔、既に文壇ドストエフスキイを云々するものありしを  
 思へば、この数首の詩に対して破顔一番するを禁じ難きもの、何  
 ぞ独り寿陵余子のみならん。(五月二十七日)

悪魔

悪魔の数甚多し。はなはだ 総数百七十四万五千九百二十六匹あり。分つて七十二隊を為し、な 一隊毎に隊長一匹を置く。是れ十六世紀の末葉、独人 *Wierus* が悪魔学に載する所、古今ここんを問はず、東西を論ぜず、魔界の消息を伝へて詳密なる、斯くかの如きものはあらざるべし。(十六世紀の欧羅巴ヨオロッパには、悪魔学の先達せんたすくからず。ウイルスが外にも、以太利イタリイの *Pietro d'Apone* の如き、英克蘭イングラントの *Reginald Sout* の如き、皆天下に雷名あり。) 又曰いはく、「悪魔の変へ化んげ自在じざいなる、法律家となり、昆侖奴こんろんぬとなり、黒驪こくりとなり、僧人となり、驢ろとなり、猫となり、兔となり、或は馬車の車輪となる」と。既に馬車の車輪となる。豈あに半夜人を誘いざなつて、煙火城中に去らんとする自動車の車輪とならざらんや。畏おそる可く、戒む可し。

(五月二十八日)

聊齋志異

聊齋志異が剪燈新話と共に、支那小説中、鬼狐を説いて、寒燈為に青からんとする妙を極めたるは、あまね 洽く人の知る所なるべし。されど作者蒲松齡が、ほしやうれい 満洲朝廷に潔からざるの余り、ぎうきだしん 牛鬼蛇神ものがたりの譚に託して、きゆうえき 宮掖の隱微を諷したるは、往々本邦の読者の為に、かんくわ 看過せらるるの憾うらみなきに非ず。例へば第二卷所載けふじ 俠女よの如きも、実は宦人くわんじん年羹堯ねんかうげうの女ぢよが、ようせい 雍正帝を暗殺したる秘史の翻案に外ならずと云ふ。こんろんぐわいし 崑崙外史の題詞に、「董」と

うこあにひとりじんりんのかんならんや  
 狐 豈 独 人 倫 鑒 一と云へる、亦這般の消息を洩らせ

るものに非ずして何ぞや。西班牙にゴヤの Los Caprichos あり。

支那に留仙の聊齋志異あり。共に山精野鬼を借りて、乱臣賊子

を罵殺せんとす。東西一双の白玉瓊、金匱の蔵に堪へたりと

云ふべし。(五月二十八日)

### 麗人図

西班牙に麗人あり。Dona Maria Theresa と云ふ。若くしてヴィ

ラフランカ十一代の侯 [Don Jose' Alvarez de Toledo] に嫁す。

明眸絳脣、香肌白き事脂の如し。女王マリア・ルイザ、その

美を妬<sup>ねた</sup>み、遂に之を鳩<sup>ちんざつ</sup>殺せしむ。人間止<sup>じんかんとど</sup>め得たり一香囊の長  
 恨ある、かの楊太真<sup>やうたいしん</sup>と何<sup>いづ</sup>れぞや。侯爵夫人に情<sup>じやうらう</sup>郎あり。H  
 ancesco de Goya と云ふ。ゴヤは画名を西班牙に馳<sup>は</sup>するもの、生  
 前<sup>しばしば</sup>屢<sup>しばしば</sup>ドンナ・マリア・テレサの像を描<sup>ゑが</sup>く。俗伝にして信<sup>あが</sup>ずべくん  
 ば、Maja vestida へ Maja desnuda との両<sup>りやうぐわたう</sup>画<sup>ゑ</sup>幀<sup>たう</sup>、亦<sup>また</sup>実に侯爵夫  
 人が一代の国色を伝ふるが如し。後年仏蘭西に一画家あり。Edo  
 uard Manet と云ふ。ゴヤが侯爵夫人の画像を得て、狂喜<sup>みづか</sup>自ら禁<sup>い</sup>ず  
 る能<sup>あた</sup>はず。直<sup>ただち</sup>にその画像を模<sup>あ</sup>して、一幀<sup>いつたう</sup>春の如き麗人図を作る。  
 マネ時に印象派の先<sup>せんだつ</sup>達<sup>だつ</sup>たり。交<sup>かう</sup>を彼と結ぶもの、当世の才人<sup>すくな</sup>少<sup>な</sup>  
 からず。その中に一詩人あり。Charles Baudelaire と云ふ。マネが  
 侯爵夫人の画像を得て、愛<sup>あいがん</sup>翫<sup>かん</sup>する事<sup>こと</sup>洪<sup>こう</sup>璧<sup>へき</sup>の如し。千八百六十



六年、ボオドレエルの狂疾を発して、パリ巴里の寓居に絶命するや、  
 壁間亦またこの檀口だんこう雪肌せつぎ、天仙の如き麗人れいじんあり。星眼とこし長へに秋波  
 を浮べて、「悪はなの華」の詩人が臨終を見る、なほ猶往年マドリツドの  
 宮廷に、黄面の侏儒しゅじゆが筋斗きんとの戯ぎを傍觀するが如くなりしと云ふ。  
 (五月二十九日)

### 売色鳳香餅

支那にりやうやう龍陽りやうやうの色しよくを売うる少年しやうにんを相しやうこう公こうと云ふ。相公の語、  
 もと像しやうこ姑こより出づ。妖えいぜ恰あたも姑こちやう娘にやうの如くなるを云ふなり。  
 像姑相公同音相通ず。すなはち即用すなはちひて陰馬いんばの名なに換かへたるのみ。支那に

路上春を鬻ぐの女を野雉と云ふ。蓋し徘徊行人を誘ふ、恰も野雉の如くなるを云ふなり。邦語にこの輩を夜鷹と云ふ。殆同一轍に出づと云ふべし。野雉の語行はれて、野雉車の語出づるに至る。野雉車とは仰何ぞ。北京上海に出没する、無鑑札の朦朧車夫なり。(五月三十日)

### 泥黎口業

寿陵余子雑誌「人間」の為に、骨董羹を書く事既に三回。東西古今の雑書を引いて、術学の気焰を挙ぐる事、恰もマクベス曲中の妖婆の鍋に類せんとす。知者は三千里外にその臭を避け、

味者まいしやは一弾指間しかんにその毒あたに中る。思ふに是泥黎でいりの口業こうげふ。羅らくわ  
 貫中んちゆう水滸伝すゐこてんを作つて、二生唾子さんせいあしを生むとせば、寿陵余子また亦骨  
 董羹どうきやうを書いて、仰如何そもいかんの冥罰みやうばつをか受けん。黙殺か。撲滅か。  
 或は余子の小説集、一冊も市いちに売れざるか。若かずし、速すみやかに筆を投  
 じて、酔中独り繡しゆうぶつ仏の前に逃禅たうぜんの閑を愛せんには。昨の非を  
 悔こんい今こんの是ぜを知る。何ぞ須臾なんしゆゆも跼ちちゆう※せん。抛下ほうかす、吾家ごかの骨董羹。  
 今こん日にち喫きつし得て珍重ちんちゆうならば、明日みやうにち 厠上しじやうに瑞光あらん。  
 糞中しやりの舍利たいかみ、大家看よ。(五月三十日)

\*

\*

\*

## 天路歷程

Pilgrim's Progress を天路歷程てんろれきていと翻譯するのは清の同治八年

(西曆千八百六十九年) 上海華草書館にて出版せる漢訳の名を踏た襲うしぶせるにや。この書、篇中の人物風景を悉支那風ことごとくに描きたる銅

版画の挿画数葉あり。その入窄門にふさくもんづ図の如き、或は入美宮図の如き、長崎絵の紅毛人に及ばざれど、亦一種の風韻ふうゐん無きに非らず。

文章も漢を以て洋を叙じよするの所、読み来り読み去つて感興反つてすくな尠すくなからざるを覚ゆ。殊にその英詩を翻譯したる、詩としては見る

に堪へざらんも、別様の趣致あるは挿画と一なり。譬たとへば生命水の河の詩に「路旁ろばう生命せいめい水みづ清流きよくながる、天路てんろ行かうじん人よろこび喜しばらく

暫とどまる留ひやつくわきくわえつらくにきようす、百菓奇花わがさいさいはひにえたりこのほのい供悦楽う、吾儕幸得此埔遊う

」と云ふが如し。この種の興味を云々するは恐らく傍人の嗤笑を買ふ所にならん。然れども思へ、獄中のオスカア・ワイルドが行往坐臥に侶としたるも、こちたき希臘語ギリシヤ語の聖書なりしを。

(一月二十一日)

### 三馬

二三子集り議して曰、今人の眼を以て古人の心を描く事、自然主義以後の文壇に最も目ざましき傾向なるべしと。一老人あり。傍はさより言を挾はさみて曰、式亭三馬しきていさんばが大千世界楽屋探しは如何いかんと。

二三子の言の出づる所を知らず、相顧みて啞然たるのみ。(一月二十七日)

### 尾崎紅葉

紅葉の歿後殆二十年。その「多情多恨」の如き、「伽羅枕」の如き、「二人女房」の如き、今日猶之を翻譯するも宛然たるいちぢだ一朶のべつつかうぼたん鼈甲牡丹、光彩更に磨滅すべからざるが如し。人亡んで業あらは顕るとは誠にこの人の謂いひなるかな。思ふに前記の諸篇の如き、布局法あり、行筆本あり、変化至つて規矩きくを離れざる、能く久遠に垂たるべき所以ゆゑんならん。予常に思ふ、芸術の境に未成品ある莫なし

と。紅葉亦然らざらんや。(二月三日)

誨淫の書

金瓶梅、きんぺいばい 肉蒲団にくぶどんは問はず、予が知れる支那小説中、誨淫の  
そしり 譏あるものを列挙すれば、杏花きやうくわてん天たうしんきそうてん、燈芯奇僧伝ちばしでん、  
 牡丹奇縁、如意君伝にょいくんでん、桃花庵ひんくわはうかん、品花宝鑑、意外縁、殺子報、  
 花影奇情伝、醒世第一奇書せいせいだいいちきしよ、歡喜奇観、春風得意奇縁、鴛えんあ  
うむ 鴛夢、野輿曝言やゆばうげん、洵牌せうはい黒幕等なるべし。聞く、夙つとに舶載せ  
 られしものは、既に日本語の翻案ありと。又聞く、近年この種の  
 翻案を密に劄きけつに附せしものありと。若し這般しやはんの和訳艶情小説

を一読過せんと欲するものは、請ふ、当代の照魔鏡たる検閲官諸氏の門を叩いて恭しくその蔵する所の発売禁止本を借用せよ。

(二月十二日)

## 演劇史

西洋演劇研究の書今は多く出でたれど、その濫觴をなせしものは永井徹が著したる各国演劇史の一卷ならん。この書、喇叭らつぱ、たてごと、琴などを描きたる銅版画の表紙の上に、Kakkoku Engeki shiロオマシなる羅馬字を題す。内容は劇場及機関道具等の変遷、男女俳優イギリスなる古今の景状、各国戯曲の由来等なれど、英吉利の演劇を論ずる



こと最も詳しきものの如し。その一斑を紹介すれば、「然るに千五百七十六年女王エリサベスの時代に至り、始めて特別演劇興行の爲め、ブラツク・フラヤス寺院の不用なる領地に於て劇場を建立したり。之を英国正統なる劇場の始祖とす。（中略）俳優にはウイリヤム・セキスピヤと云へる人あり。当時は十二歳の児童なりしが、ストラタフォルドの学校にて、ラテン羅甸並にギリシヤ希臘の初学を卒業せしものなり。」の如き、破顔微笑せらるる記事少からず。

明治十七年一月出版、著者永井徹の警視庁警視属なるも一興なり。  
（二月十四日）

寿陵余子

（大正九年）



# 青空文庫情報

底本：「筑摩全集類聚 芥川龍之介全集第四卷」筑摩書房

1971（昭和46）年6月5日初版第1刷発行

1979（昭和54）年4月10日初版第11刷発行

※「膏盲《かうまう》」に対し、底本は「「膏盲」が正しい。」と注記しています。

入力：土屋隆

校正：松永正敏

2007年6月26日作成

2007年12月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 骨董羹

—寿陵余子の仮名のもとに筆を執れる戯文—

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

著者 芥川龍之介

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>